

上海の廣東人

—— 穆時英の小説から

高橋俊

はじめに

「大きさはヨーロッパとほぼ同じです」。中国の国土の広さを表すとき、しばしばこの形容が用いられる。中国の面積は約九六〇万平方キロメートル。いっぽうヨーロッパは、範圍をウラル山脈以西とすると約一〇〇〇〇平方キロメートル。まさに「ほぼ同じ」である。

それほど広大な領土を持つにもかかわらず、中国内部の文化的差異は、ヨーロッパと比較して、驚くほど小さいといえよう。たとえば、中国北部の黒竜江省ハルピン（哈爾濱）から南部の雲南省昆明までは直線距離で約三二〇〇キロメートル。同じ距離をヨーロッパで探すと、マドリッド—サンクトペテルブルクがほぼそれに当たる。後者は、「現地の言葉」での意思の疎通はほぼ不可能だろうが、前者の場合、相当なお年寄りでもない限り、日常会話レベルでの問題はなし、生活様式も、気候による違いはもろろんあ

るが、「漢民族の生活習慣」という点では、前者ほどの差はないといっていだろう。それ以外にも、パリ—ベルリン間（八七〇キロ）より北京—上海間（一〇五〇キロ）が長いなど、中国の広大さと、それにもかかわらず文化的に相当統一されている、という点を指摘する例は枚挙に暇がない。

ゆえに、中国内部の文化的差異は、少数民族問題等を除けば、「誤差の範圍」もしくは「雑談レベル」ですませられる場合が多い。日本でも「関西人はカネ儲けに目がない」とか「高知人は酒に強い」などのご当地ネタがあるように、中国にも「上海人はカネにこすつからい」「北京人は政治の話が大好き」など、この手のネタには困らない。こういうご当地ネタに関しては、中国でも多くの書籍が出版されており、日本でもいくつか出版されている。とはいえ、こういった「地域性ネタ」は、（アンケートや統計で調査可能な項目を除くと）「証明」するのが難しく、ゆえに学

術的な研究対象にはなりにくい。また、「日本人はこう考える」「中国人はこういう人たちである」という国民性論も、文化本質主義である、として、今では、研究テーマとしては、忌避の対象である。

とはいえ、一方で、「大阪人は……」「中国人は……」など、さまざまなレベルで地域性のイメージが流通していることは、これも否定できない。そのイメージに実体があるかどうか、という問題をひとまず置いて、そのイメージが何によつてもたらされたのか、という点を探ることに、意味がないともいえないだろう。

本稿では、上海から見た広州・香港のイメージについて考察する。中国南部を代表する都市であり、政治の街・北京に対抗して、ともに商売の街と称されている。上海―広州間は約一二〇〇キロメートル。ヨーロッパでいうとマドリッド―ロンドン、あるいはベルリン―ローマがそれにあたる。ちなみに、日本だと高知―札幌の距離である。

上海と広州・香港の二都市の間にはさまざまな因縁もあり、私も以前に論じたことがあるが、本稿では、一九三〇年代に活躍した、穆時英という作家の作品を元に、このテーマを論じてみたい。

穆時英は一九一二年上海生まれ。光華大学在学中、十八歳の時に「咱們的世界」（一九三〇）で文壇に知られる。

その華やかな生活ぶりが大衆紙でしばしば取り上げられるほどの有名人であった。元ダンサーと結婚するも、妻が夫の派手な生活に嫌気がさし、香港へと「逃亡」してしまふ。その後を追って一九三六年に香港へ渡り、現地でも執筆活動を継続。三九年に上海に戻り、二十七歳の若さで国民党系の新聞社の社長になるが、翌四〇年、暗殺される。

彼の小説を題材に選ぶのは、「私が穆時英を研究しているから」という以外にはさしたる理由もないのだが、しかし生粋の上海人である彼の小説には、要所要所に広東人のイメージをうかがうことができ、しかもそこには、大きく分けて二つのイメージが投影されているのである。本稿では、この二つのイメージから、「上海（人）の広東（人）イメージ」の一端を提示したい。

一

まずは「公墓」（一九三三）を見てみよう。この作品は、雑誌『現代』創刊号の巻頭を飾った作品である。冒頭、主人公は母の墓参りに来て、そこで純粋無垢な少女に出会うのだが、この少女が広東人に設定されている。

「あのお墓は彼女の家の？」

「斜め向かいの、右側から教えて四番目、花が供え

てある——分かりますか？玲お嬢さんは今朝来られました。」

そのお墓はとても清潔で、私は以前、そのお墓を母のものと同化したことがあり、欧陽という姓だと覚えていた。

「欧陽という家じゃない？」

「そうです。広東人です。」

「亡くなったのは彼女の誰？」

「おそらく、彼女のお母さんでしょう。」

「いつもここに来ては母親と過ごす孤兒なんだな」
この時私はただこう思っただけだった。

主人公は徐々に、少女の純真さに惹かれていく、

「これは君のお母さんのお墓？」

彼女は声を出さず、天真爛漫な口の端から望郷の愁いを帯びた笑いを送りつつ、うなずいた。

「こんな明るい季節に郊外に来て母と一緒にすごすのは、ほかのどんなことより楽しいよね」やむなく滑稽な一人芝居を演じたが、まるで喜劇へと変わるようだった。

「静かにここに座って青い空を見ているのは気持ちがいいわ」彼女は座ったが、私を拒絶するようではな

かった。いつもあなたがあそこ、お母さんのお墓のところに座っているのを見たわ——あなたは毎日来ているの？」

「ほとんど毎日かな」私も一緒に座ったが、同時に——「私を礼儀知らずだといって責めないだろうか？」
こう思った。「僕のお母さんはね、ヒルが大嫌いだったんだ！」

「お母さんが！」彼女は遠くを見ながら、静かに笑った、彼女の視線には、彼女の微笑には、薄い霧がかかっているかのように、ある種の暖かい感覚を暗示していた。

私は酔っ払ったかのように、彼女の朦朧とした視線と微笑みの先に横たわった。

「そういえば、お母さんは僕が学校をサボるのを手伝って、僕を叔母の家に預けて、お父さんに知られないようにしてくれたんだ」

「お母さんが私に編んでくれた毛糸のシャツ、私が三歳のときに着た毛糸のシャツは、まだ首飾りを入れる箱に入れてあるわ」

「お母さんはタバコが嫌いで、いつもお父さんの口から取り上げていた」

「お母さんは白いハスの花が大好きで、私はライラックが好き」

私の父は、母を少し怖がっていた。

「お父さんと喧嘩すると、お母さんはいつも泣いた。僕もお母さんが泣くのを見て泣いたことがある」

「お母さん！」

「大理石の下で静かに眠っているお母さん！」

「私のお母さんも大理石の下で眠っているわ！」

遠く離れた母を想う思い出の中で、私たちの間の友情の感覚が混じりあった。私たちはいつまでも母の生前を語り合った。まるで五歳の子供同士のように。

このあと、主人公は彼女との距離を縮めていくのだが、小説中では、彼女が南方の出身だということが繰り返し語られる。

一度だけ、彼女が同じ歳ぐらいの少女たちと、彼女の母のお墓のそばでピクニックをしているのを見た。

彼女たちは大声で笑い、おしゃべりしていた。彼女の楽しそうな笑い声には伝染性があり、大理石も、獅子の像も、半分に折れた柱も、草木も、みな私に向かって騒ぎ立ててきた。

愉快だ——四月、恋の季節！

私は楽しくなって笑った。ホトトギスは野原でクローブの憂鬱を叫んでいる。田舎の道を学校に向かって

歩いていると、飢えを忘れたように、彼女の広東訛りの鼻音を帯びた「あなた」という発音を思い出す。この「あなた」の可愛らしさは、私に明媚な南国を崇拜させる。

彼女は銀の皿を持ってきて、私にミルクティーを注ぐと、バナナクッキー一枚とパンを二枚くれた。

「私が作ったの。香港ではいつも椰子のクッキーとライチのクッキーを作ってお父さんに食べさせていたわ」

彼女は机の側にたつて私が食べるのを見ていた。子供のように。

やがて彼女は父の仕事の都合で上海を離れ北京に、そして彼女は香港に住まいを移す。二人は手紙のやり取りを続けるが、やがて彼女が病気で亡くなった、という手紙を彼女の父から受けとる。

彼はふたたび、二人が出会った上海の墓地を訪れる。

「彼女のお墓を見に行くかい？」

そして私は彼「彼女の父親」と一緒に歩いた。道端でひと束のクローブを買った。

郊外では、南からの風が、晩春の香りを吹きつけて

いた。明るい太陽、青い空、野の花すべてが笑みを帯びていた。「中略」

「愛娘歐陽玲の墓」

私は忘れない、あの夢のような、霧を帯びたような瞳、健康的ではない皮膚、そして、「分からないわ」という言葉。私は分かった、しかし遅すぎた。

彼は帽子を脱いだ。私も帽子を脱いだ。

なんとも甘酸っぱいストーリーだが、この小説において気になるのは、ヒロインを広東人に行っていること、そして広東人の少女のあまりの幼さ、である。少女は十八、九歳に設定されているのだが、二人のやり取りは、まるで「五歳の子供同士」のようである。もちろん、健全な少年少女の交流を描いた、ということでも何も問題はないのだが、一方で穆時英は、同時期に、上海の上流階級の、手練手管を駆使した男女関係を描いてもいる（「上海的狐歩舞」等）。「純粹な広東人少女」の形象には、「たまたま」ではない、何か別の意味合いがあるのではだろうか。

二

民国期において、「上海の広東人」とは、どのような存在だったのか。

上海という都市内部のエスニシティについては、これまで、多くの研究の蓄積がある。たとえば Emily Honig は、上海における江北人（江蘇省の長江以北に居住する人々）の存在に焦点を当て、江北人が「下層階級」として析出されていったそのメカニズムを論じている。また、Bryna Goodman は、民国期の上海の社会生活は、各出身地の同郷組織ごとに営まれており、就職や商売、そして冠婚葬祭にいたるまで、同郷組織が大きな役割を担っていたことを明らかにした。

さらに、戦前のいわゆる上海モダン文化と呼ばれるものは、その多くが広東人に由来するものだ、というのも、近年の研究で明らかになりつつある。村井寛志は、民国期上海のマスメディアが、香港や華僑のネットワークにより形成されていたことを、また菊池敏夫は同じく民国期上海のデパート文化が広東資本によって構築されていたことを、ともに丹念な実証研究で明らかにした。「上海の広東人」は、上海の社会・文化に、しっかりと根付いていたのである。

上海は中国の経済の首都であるが、その市場においては寧波人と広東人の勢力がもっとも有力である。例えば先施公司是広東商人が設立したものであり、ゆえに寧波同郷会と先施公司是上海市場を代表する二大柱

石なのである。寧波人と広東人は異なる点もあるが、それぞれ地理環境の影響を受け、山海が交錯し、土地は狭く人は多く、ゆえに人々がみな簡単に故郷を去るが、しかし一方できわめて故郷を愛しているというのは、一致した点である。¹⁰

上海には全国各地の人々が居住しているが、強い力を持つているのは（もちろん外国人は除く）、次の三種の人々である。

- (一) 寧波人
- (二) 広東人
- (三) 江北人¹¹

つねに広東人と併称される寧波人は、上海の近隣の都市であり、また江北も上海からはごく近い。それに比べても、地理的距離のある広東人の、上海における影響力の強さは特筆すべきものがある。

しかし、これだけ影響力が浸透しているにもかかわらず、上海において広東人はあくまで「余所者」であり続けた。次章では、上海における広東人のイメージを、具体的に見ていく。

三

当時の上海（人）における広東（人）イメージはいかな

るものであったのか。本章では、そのイメージを二つに分けて、考察する。

1. 文化砂漠・広東

第一章で見た「公墓」では、広東人の少女・欧陽玲がきわめて純粹無垢、悪くいうとあまり知性が感じられない少女として描かれている。主人公と彼女が交わす会話は「五歳の子供同士のよう」であり、会話の内容にはほとんど何も意味がない。もちろん、その意味のない会話の責任は主人公にもあるが、小説では、どちらかといえば、主人公が彼女の知的レベル（もしくは言語レベル）に合わせた結果、として描かれているように見える。

また、穆時英が香港時代に執筆した作品、「第二恋」（一九三七）は、上海から香港大学に進学した青年が、香港の富豪の娘と恋に落ち、彼女に釣り合う男になろうと上海に戻り仕事に励むが、その間に娘が結婚してしまう、というストーリーである。この小説のヒロイン・瑪莉も、「公墓」の欧陽玲と同じく、純真無垢なイメージを帯びている。

この時、我々が彼らのことを話していたのを知っていたかのように、こちらに向かって笑いかけてきた。

彼らにお辞儀をしながら、宗濂君について近づいていた。白のブラウスを着て、オレンジの口紅、唇から

はあどけなくわがままな性格がうかがえた。この女性
は若いだけでなく、たいへん綺麗で、綺麗なだけでな
く、一目見た人に小鳥を慈しむのに似た愛情の心を抱
かせた。

「我々のゲイリー・クーパー、章士焯氏です、甘い
チョコレート、容瑪莉さん」宗濂君がこういうと、彼
女は顔を上げて、何の遠慮もなく私を見、また私の目
を見た。彼女は透き通った、一転の曇りもない瞳をし
ていた！

本当に面白い子だ！私は思わず笑ってしまった。彼
女はたつた今、人生に目を向けたばかりで、まるで白
痴のように天真爛漫だった。

「瑪莉、君は本当に可愛いね！」

褒められてとても嬉しいらしく、顔を上げて私を見
ると、笑い始めた。彼女の瞳にはまだ乳臭さが残って
いた。

「本当？」彼女はいった。

「本当さ」

「ウソばかり！」

「誓ってもいい」

彼女はようやく安心したようだった。「ありがとう、
章さん。あなた、いい人ね」

もしいるのが外の庭だったら、私は大声で笑いだし、
彼女の長い巻き毛を撫でていただろう。彼女は人形と
一緒に童話の世界から抜け出してきた人魚姫なのだ。

「乳臭さが残る」「白痴のよう」なヒロイン・瑪莉との
会話は、相変わらず意味がない。これはほとんど、「公墓」
のやり取りと同工異曲である。

さらに、「上海的季節夢」(一九三七)は、穆時英の他
の小説の登場人物が織り成す人間模様、といった体の作品
だが、ここに許仕介という、穆の小説にたびたび登場する
大学生の青年の「女性品定めメモ」が載っている。その中
の、李玲仙という女性についての記述。

許仕介の備忘録(二)

第九号・李玲仙

等級・A+

伝…百万長者李鉄侯の一人娘。南方の大学のミス・キ
ャンパス。カトリック教徒。広東新安人。

速写…肩にかかった、ピロードのような長い巻き毛、
太陽の下では明るく褐色、男性と話す時には秘密の黒
色を帯びる瞳、柔らかな長い睫、怒った時も清らかな
声、ギリシヤ人のような高い鼻、生え際に向かって射
るような眉、笑う時に物柔らかな声、下に落ち窪んだ

鼻、生え際に向かつて伸び、目尻のところを下がった、天真な眉、健康な処女である。

以上のように、穆時英の小説に出てくる「広東人少女」は、「純真無垢」で「無知」な少女として塑像されている。それは、彼の小説にたびたび出てくる、世慣れて狡猾なイメージの「上海人少女」¹²と好対照を成している。

純真さのいっぽうでの無知蒙昧。これは少女のみならず、当時の中国人知識人が広東・香港に抱いていたイメージでもあった。「文化砂漠」ということばに代表されるように、北京や上海の知識人にとって、南方は文化不毛の地、という拭いがたいイメージがあったのである¹³。

2. 戦いの街・広東

一方で、上海人にとって、広東は常に戦いのイメージに彩られていた。

古くは、太平天国。その烽火は広東から上がり、そこから北上していった。上海に到達したのは一八六〇年。それ以前に、上海ではこれも広東人を中心に結成された小刀会が「反清復明」を目的に蜂起し、当時の上海知県を殺害し大明会を称していたが、のちに太平天国と合流した。この小刀会の蜂起は、上海における初めての市街戦といわれている。

太平天国の乱終結後、上海は租界を中心とした都市であるがゆえの安寧を手に入れ、清末民初の動乱もほぼ無傷で乗り切るのだが、次に上海で起きた市街戦が、一九三二年の一二八事変（第一次上海事変）である。

私は従来、この一二八事変は民国期上海におけるエポックメイキングであると主張し、いくつか論文を書いてきたが¹⁴、当時の上海市民にとって、安全安心なはずの上海が戦場となった、ということは、この上もない衝撃であったのである。

その一二八事変の日本軍の侵攻を救ったのが、広東の軍閥を中心に組織された軍隊、十九路軍であったのだ。十九路軍の力で、日本軍は退却し、十九路軍は上海で一躍、ヒーローの座に座ることになったのである。

しかし、これは皮肉にも、「広東＝戦いの街」、というイメージを、強めることになったのではないだろうか。当時の新聞には、上海市民が十九路軍の慰問に行ったが、言葉が通じなかった、という報道がしばしばなされている。そもそも兵士という職業が帯びたイメージ¹⁵ともあいまって、広東人兵士の姿は、ある種不気味な印象を与えた、ともいえるのではないだろうか。

穆時英の小説でも、戦いは広東からもたらされている。彼の処女作『交流』（一九三〇）は、上海でキャンパスライフをエンジョイする主人公が、恋人が他の男と結婚した

腹いせに、広東へ行って兵士になる、とうかななり荒唐無稽なストーリーの作品である。

「広州へ行って何をするんだ？」

「従軍——いや、血を流しに行くんだ！」彼は眉を寄せた。

「しかし——」

「いや、僕はそんなに多くのことに構ってはいられない。やりたいと思ったことをやる、誰にも止めることはできない。これが僕の出路だ。僕のような人間が、こういう目に遭ったら、こういう結果になるしかないんだ！」

主人公にとって、軍に入ることとは振られたショックでの衝動的なものであり、それがすなわち「広州行き」なのである。そして彼は兵士として戦闘を重ねるにつれて情緒不安定となり、やがて上海へ戻って、彼女と他の男の結婚を取り持った老人を射殺し、自らも銃で自殺する。小説での彼の行動はまさに「狂気」としか言い様がないが、その「狂気」を彼に植え付けたのは、他ならぬ「広州行き」なのであった。

「我們這一代」（一九三六）は、一二八事変に遭遇した大学生が、自分の街を守るため、銃を持って戦う、という

ストーリーである。一二八事変が舞台なので、ともに戦う兵士たちは当然広東人である。

「誰？」

裏門の呼び鈴が鳴った。裏門は小道沿いにあり、彼が立っている部屋の窓からは、誰が鳴らしているのかまったく見えなかった。

彼は急いで三階から駆け下り、建物の外に出ると、下男部屋と車庫の側にある水門の道に来たとき、老門番がすでに扉を開けており、門の外の一小隊と隊長らしき軍人がすでに入り込んでいた。十七、八人の兵隊は、みな体が小さく、八、九歳の子供のようで、厚ぼったい綿の上着を着込み、てんでに手榴弾や、フェルト靴や、ほうろうのカップや、弾帯や、帽子を身につけていた。銃の刀剣は門の明かりに北極星のように冷たい光を放っていた。先頭を歩いてきた隊長らしき人物はとても痩せており、頬骨は尖り、見たところとてもしつかりしていた。

この後、主人公は「八、九歳の子供のよう」¹⁶な兵士たちとともに戦うのだが、自分が生まれ育った上海を守りたいという主人公の思いと、あくまでも命令待ちで動く部隊との思いは当然ながらいまひとつ噛み合わず、結局彼は怪

我をして、病院に運ばれることになる。

「広東『戦いの街』というイメージは、当然ながら、「広東『野蛮な地』というイメージももたらした。「広東」の近年盗賊が多いことは、天下に甲たるものであり、報道でも絶えることがない。一家で数回「強盗に」遭った者もあり、一夜で数軒遭ったこともあり、陸路で来るのを止めた者もある。およそ広東と往来しようとする者にこのことを伝えるときみな慄然として色を変え、商人はこれを「恐怖の道」といつている」¹⁷など、その「野蛮さ」を語るエピソードは枚挙に暇がない。

広東は「革命の策源地」であり、近代中国の革命史において欠かすことのできない都市であるが、それはすなわち「戦い」のイメージに彩られた都市、ということも意味していた。なお、魯迅「一八八一—一九三六」は、広州滞在時に、自分を「戦士」として祭り上げようとする当地の空気に嫌気が差し、一〇ヶ月もたないうちに（一九二七年一月一八日—九月二七日）、早々に上海へと居を移している。

四

以上のような、「純真無垢／無知」なイメージと、「野蛮な戦いの街」というイメージは、いうまでもなく、別々

の二つのイメージではなく、同じものを表裏からみたものである。無知は容易に野蛮へと転換する。というより、上海の広東イメージにおいては、そもそもあつた野蛮のイメージが、少女の描写においては都合よく純真無垢に変換された、と考えるほうが、実情に合っているのだろう。

もちろん、「上海の広東人」イメージについては、穆時英に限らず、多くのサンプルがある。あるいは、「広東の上海人」についても見なければ公平ではない、ともいえる。今後の課題としたい。

おわりに

「上海人の広東人イメージ」が分かって、さて、どうなるのか。

もちろんこれは、「上海人はカネにこすっからい」「北京人は政治の話が大好き」などの中国の地域性イメージに「広東人は無知で野蛮」というイメージが加わった、ということにすぎないのかもしれない。しかし、他者に貼られたレッテルが、自分たちの行動を規定する方向に作用することも、決して少なくはないのである。例えば一九三六年の「広東語映画禁止騒動」では、上海映画界からの禁止の動きに対し、むしろ自分たちの欠陥を「自家中毒」的にあげづらい、自己批判する、という行動が見られた¹⁸。また

近年の東アジアでは、それぞれが他国をイメージによって批判し、批判された方がそれにマジレスすることでさらなる批判が起こっていくという、空中戦の泥仕合が展開されている。

ここここに至っては、我々の研究によって融和を目指す、というのは、絶望的に見える。しかしそれでも、イメージの淵源を追い、誤解があればその誤解を解く、というのは、迂遠ではあるが、唯一の方法にも思えるのである。

注

- 1 例えば楊東平『北京人と上海人——攻防と葛藤の二〇世紀』(趙宏偉等訳、日本放送出版協会、一九九七)、日中交流中国地域性研究チーム編『図解 中国の地域性がわかる本——一三億の巨大市場を読み解くカギ』(産学社、二〇〇四)、高橋基人『こんなにながら中国各省気質』(草思社、二〇一三)等。
- 2 いうまでもなく、広東と香港を一括りに考えるのは乱暴ではあるが、ひとまず本稿では、「上海から見た南方」として、ひとまとめに考察することにする。
- 3 中国では総じて長江以南を「南方」と呼ぶようである。もちろん、これも地域によって若干の差があることは、いうまでもない。
- 4 拙稿「遅れてきた〈新生活〉——一九三六〜三七年における「広東語映画禁止」問題について——」(『高知大國文』三七、

二〇〇六)。

5 本稿における穆時英の作品は、嚴家炎・李今編『穆時英全集』全三巻(北京出版社出版集團・北京十月文芸出版社、二〇〇八)による。作品名につけた年代は初出である。

6 Emily Hong, *Creating Chinese Ethnicity: Sabei People in Shanghai, 1850-1980*, Yale University Press, 1992

7 Bryna Goodman, *Native Place, City, and Nation: Regional Networks and Identities in Shanghai, 1853-1937*, Univ. of California Press, 1995

8 村井寛志『良友』画報と華僑ネットワーク——香港・華僑圈との関連からみた上海大衆文化史』(『東洋史研究』六六一、二〇〇七)。

9 菊池敏夫『民国期上海の百貨店と都市文化』(研文出版、二〇一一)。

10 寧波旅滬同鄉會月刊』七三、一九二九年八月。本稿の引用は宋鈞友『広東人在上海』(上海人民出版社、二〇〇七)による。

11 彭子蘊「勞動者與「江北豬糞」」(『社会週報』一一二、一九三四)。本稿の引用は前掲『広東人在上海』による。

12 実際には登場人物が「上海人」として出てくることは少ないが、舞台が上海であるなどから、地元人として設定されていると思われる。

13 拙稿「遅れてきた〈新生活〉——一九三六〜三七年における「広東語映画禁止」問題について——」(『高知大國文』三七、二〇〇六)参照。映画界の話であるが、上海映画界は、香港・廣州映画界を、「低俗」を理由に最初から馬鹿にしていた。

¹⁴ 「上海事変をめぐる報道と上海人アイデンティティの形成」
『東方学』一〇七輯、二〇〇四。

¹⁵ 中国は伝統的に、「良鉄は釘にならず、良民は兵にならず」という言葉に代表されるように、兵士を下に見る傾向にある。

¹⁶ 「南方人は背が低い」というイメージは、中国では広く行き渡っている。

¹⁷ 『申報』一八九〇年二月一日。本稿では宋鈞友『広東人在上海』による。

¹⁸ 前掲拙稿「遅れてきた〈新生活〉」。

附記 本稿は、日本現代中国学会二〇一三年度関西西部会大会（龍

谷大学ともいき荘）での発表を元にしたものである。

会場では多くの有益なご意見をいただいた。記して感謝する。

（たかはし・しゅん 本学教授）